



新  
18  
6

櫻姫全傳曙草紙卷之五

江戸

山東京傳補綴



曙卷之五

第十七

鷲尾家士復故君誓

おきて弥陀二郎姫と員逃去り途中より篠村二郎山吹取ふそ  
飯来ふ小恰好出會互ふ夏のめしと語り四人相連て公光が家小到り

弥陀二郎篠村兩人相別竹の下道の一別以来の夏と語りのひ弥陀

二郎清玄の執著の悪念ゆき姫を殺して救ふ

夏の始終とめられぬ極ひめん甦生して彼不苦められらる子細と語りて

同ふ心ひらり叔弥陀二郎篠村と心と合せ田鳥造酒丞と始りて

とめりてはめられ住て仇家とらめり同志の義士等とめりて平太夫

と打く亡君不手向ふやと相議しける所ふ三木之助伴宗雄も舅の仇



とひくい家を再興とべりくをりて宗雄と仇打の主と藤村八重  
弥陀二郎造酒丞を始として荒部三郎。前山四郎。栗村善太。雀部強助  
志麻勇平。船井橋三。和久九郎八郎。横作惠六。船城十郎。との余宗雄が  
家士三人。藤村が妻山吹。同家僕藤六等。都合十八人。信田が家小乱入して  
つひ平太夫を打取首。義春の靈前ふる。追善が修一夜を日小  
はれて旧地小館をつら。極みひらうらじめけうへ野分の方のゆくへ草紙  
りうらてぬねべ一珠更九郎判官の賜る太刀と家系の二巻を持てたらのれ  
一とされべれまて家相續はか。誰とけ夏小用べと宗雄衆人小  
ひひて議一ひ造酒丞を。と某小令せ。いふはしてゆゆと  
とあわゆ。またせんとアとみぞ宗雄をひ則。ひ小令せ。ひらみとの丞  
いふ旅の。とひひと調ひぐと。ひてともひく。とひら。夫へ相おさ。夏文

曙巻之五

蝦蟇丸日向の國小對て住居をり。た。ら。小飯来り。ね。お。お。の。方。飯  
國のぬひとのべ。の。ら。松虫鈴虫兄弟の娘出奔。一。と。り。し。ひ。語。り。け。れ。ん  
が。丸。を。と。ま。そ。と。賣。べ。と。の。ぬ。惜。ま。宝。と。矢。ひ。つ。つ。夏。と。ひ。ひ。て。悔。ひ。つ  
重てのひらうら。彼國小住居をり。と。ら。わ。つ。れ。ら。わ。ふ。は。家。と。取。取。汝。を。連。て  
彼。ふ。去。心。安。居。む。む。と。ひ。お。仲。か。の。方。と。ひ。ら。と。ひ。れ。夏。あり。と。答。つ  
が。丸。を。携。来。つ。旅。の。具。と。取。と。さ。ひ。と。と。行。李。と。ひ。ら。う。ら。小。尾。長。の。蝦  
蟇。数。の。を。え。つ。つ。て。心。中。小。ぶ。う。ら。う。ら。が。不。氣。ま。れ。体。を。は。其。夜。よ。い。と。り。て  
か。丸。小。ひ。ひ。け。ら。お。ん。身。前。の。年。丹。波。の。國。鷲。の。尾。の。家。小。捕。れ。獄。舎。と。破  
り。と。逃。出。ま。し。夏。の。と。ど。や。と。ひ。の。か。丸。と。れ。ぬ。や。う。と。心。中。小。驚。と。し。ん。と。さ  
と。ぬ。体。を。は。り。う。ら。う。ら。の。ひ。ら。う。ら。我。さ。ら。お。お。え。曾。て。は。は。ひ。の。と。ふ。と。い。ふ。を  
野。分。の。方。い。と。く。お。ん。が。行。李。の。う。ら。小。携。と。る。蝦。蟇。の。尋。ね。の。れ。べ。と。物。小



のどと蝦蟇つゝいといふ賊徒の證お持りのははぬぬもふおん若彼輩  
の中間にて前年鷲の尾の家お捕れむじ人あいなやと尋て問侍  
ありと云ふ九云いふも我いぢつゝの首まうのぢも新お手下の  
時あつたお携来りれされと鷲の尾の家お捕れらるおぢえは、その  
我手下の老あやのつゝんとつゝりさうふてもおぢもふおの蝦蟇とえ  
らるやとつゝいふうりければおぢの方け答ふもさつゝまらまらめりてありぬ  
其故ハゆゑに語らふべし旅のつれもの人お且酒一のりてすゝいむへま  
云てけ場ともせううこれより互お心底と疑心いでさふうりかま丸つひて  
おぢの方の携来りし太刀の一のりあゝと珠お錦の袋お入る守中この  
と肌ささりと持るといふうりければおぢと云ひれと云容易お実をはじかじと  
らひ次るお酒ともめてつゝおぢも熟睡時をうらゝこの袋とらして

曙卷之五

のどとるお就ちの尾の家系まれば大お鷲ささとして鷲の尾の内室お  
おはせられ男子おまゝなる手段のうへお膽太れ女おられ我義春と打  
らるお寢首とおんも計がじと申のさし殺して後日の災とておふを  
いし心成ささめその夜いそのお臥おりおつる日おのりおぢの方の心  
あゝ鏡おむくひく髪とらりのけ居る油の折をうかひかま丸つとよと  
押伏高手小手おうらるればおぢの方驚れおん言狂氣にさあおふ  
この罪ありておんいさめおみと云おの丸答りせと門の柱おうらつて  
云々おんお福原の皇居お仕へる官女野分と名お秋雨と云るうと云へつゝあて  
實へ鷲尾十郎お義春が妻おるべし昨夜おぢお持ると家系の一巻  
とて我れを曉しぬとて生おくべき者おのりおぢ仔細と語りて  
一我平田四郎が子まらとほいつゝり實ハ海賊の首長木村お若



の子あり義春が先祖訖尾太郎維綱がふふ父利元と打れて無念骨髄  
不徹しせめて其子孫より義春を打て恨とくけむと前年午下の小  
賊どもと具して丹波小つら敵のひもとうまひくる小坊のく重病小カ  
よらりて捕へられりと辛く逃去時のつらとまらくる小幸信田平太夫  
小荷擔して第中小忍入義春と打て日未の宿志とらげぬまうの忠今  
汝と殺して後の災とくぶくあり観念せよと云ひも此分の方盡とく  
牙とあして云扱へ義春殿と打つる信田の刺客は汝めてのけり我一旦汝  
が愛情の切あふ心迷ひくわ荒家小月日成かことつとも汝我と  
日向國小連ゆんと言ひの急遠國かつらく日未去くとく小娘小のひ  
がく殊小昨夜汝が答へるこのじのゆえに且汝いさまらんれ途中小  
於と汝を害し逃去て娘様ひのゆへと尋むや暗小胸とくくめかれ

曙卷之五

つふ小娘小前を越られとらとらとさよは一人の男子小てのりあが女の手  
段をかそれかくらとらとらと殺さんぞら比真至極の仕業ありとくく繩を  
立合て勝負を決とべしと云が丸打笑比真もいへて筆を困て鳥を失  
んすり圍のうらの獸を屠る小あらじと中冥途小赴いと云つ氷とく刀を  
抜て唯一打とらうのぐ時一俄小一陳の冷風吹来て空中より一つの小蛇  
あつりれかてが丸小丸つさ右の腕小まもひつとさうが忽腕をひれて打  
くこのつとらとらに惘然として心たぬとぬと強氣の者あら自己志を  
くげませ小蛇をとりとらとら又刀をあらうのぐ小前茂林の裏小弦音漂と  
鳴しとらとら一とららの箭花来てが丸がびなとらとらを籠籠小く射とら  
とら一箭ありとらとら屈強の矢坪とらとらけりつたれりへき忽倒て  
死てたりとらとら小茂林のうらとらとら旅装束とら一人の武士二所藤乃



ちを小服こふく小ふくしきとてゆりねいひやうくに悠々と歩あゆみ来きて野分のわけの方かたのいほめ  
とこれ上うへ坐まふききて茶ちや礼れいをかこみ野分のわけの方かたけ人ひとをえり小乃このの是田鳥しでん  
造酒さうじゆ丞じやう頭ぢゆうをさけて云いけらる君きみの所  
ゆくへをりし心こころを碎くださゆく山やま中なかつ小こ丸まる住すまいしをす  
らつこと尋たづねりつふ折せりよく危あや急うせを救すくまりし誠まこと小御こみ運ゆんのつよ  
まゐらうといひて宗雄むねおとと主しゆと信田しんでん平へいを夫つまを打うち取と館たてを新造しんぞうと  
搦なひめを移うつしらう始終しじゆうと語かたれば野分のわけの方かたまじくまじくまひひけけるる丸まると  
云い者ものと信田しんでんの刺し客きゃくとあり相公さうこうを打うちる者ものと告つげればらみみの丞じやう  
とらうと亡君むしうきんの仇あひとゆいするをまひひ野分のわけの方かたけ家いへ小このりゆゑを  
とひくる小野のの分わけの方かたが丸まるが妻つまとありとらうとらうといひて唯ただこれのおぼ  
ひんて捕とられつるが幸あはれ小乃こののをくらけりごとつらつら宝刀たうとう家系けいも失うせ

曙卷之五

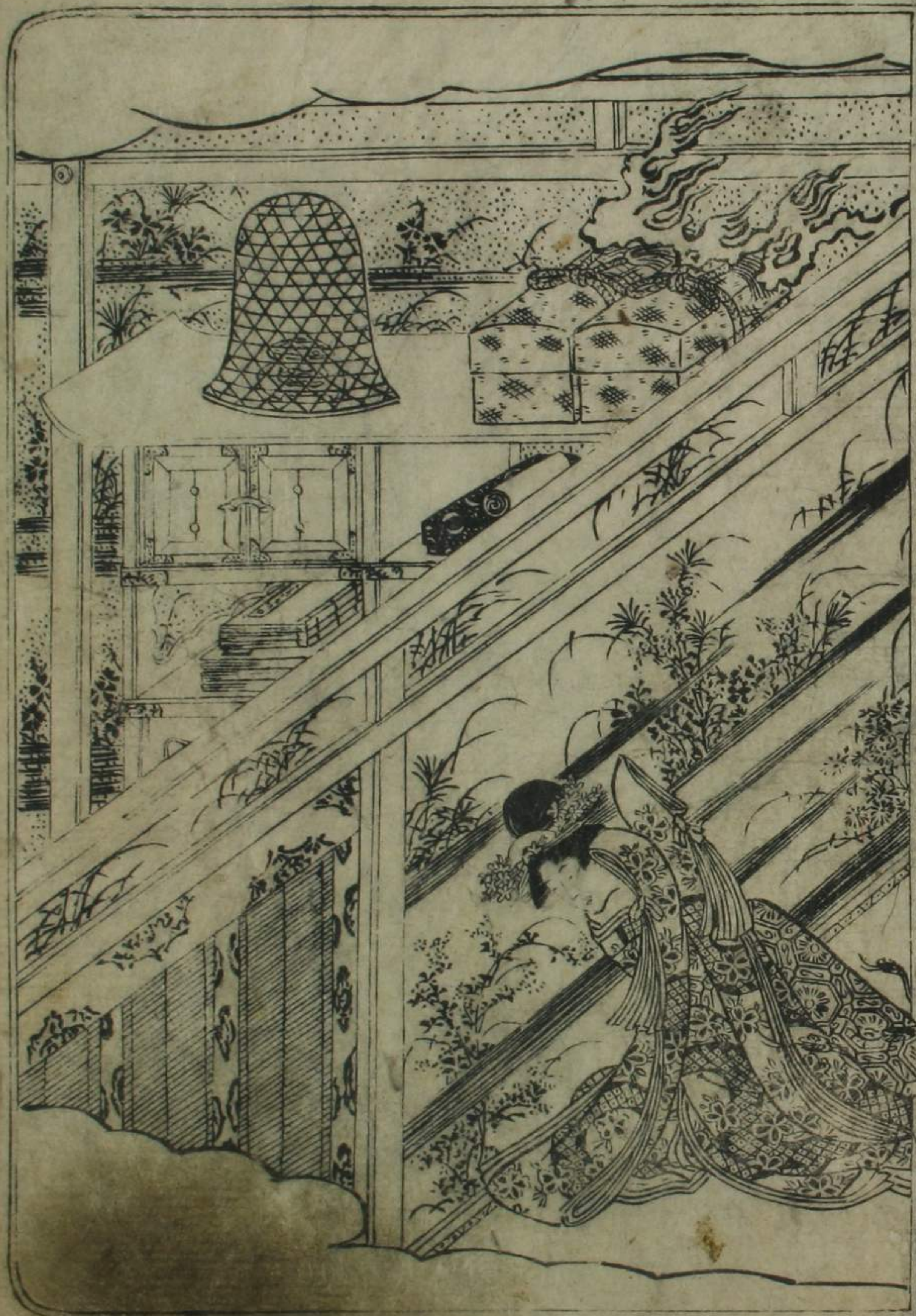
いどそ二品ふたしやうを渡わたしつれぶみこの丞じやうかゝりて取とり外との方かた小出こで扇あふ  
とめけてさうまねくとひとく茂林もはやしんのうらより十四五人の従者じゆしや梨地りぢ小  
高たか蒔ま繪えしと光ひかりをさるるあ物ものをかきと出来こと一いかかのの衣服いふく  
をとりてまゝ野分のわけの方かたけのままねねをねだだととこれを著き更さらななれれぬぬの  
色いろ手て小こううつつととりりふふかかややららみみこの丞じやういご御ご取と國くにののおおべべ  
とつふ小ど野分のわけの方かたけのううららななづづけけいいととららふふ物ものののううららななづづけけいいのの丞じやう  
が丸まるが首くび打うち落おしと携たへへ従者じゆしや小下こ知ちして前後ぜんごの列れつを正ただし麓ふもとと  
さしていとだ下りぬ

第十八

櫻姫さくらひめ魔ま鬼おに妖まじ氣き三さん卧い病びやう

去程きよぢやう小造こぞう酒しゆ丞じやう野分のわけの方かたを守護しゆごし蝦え蟄せ丸まるが首くびととらうとて取とり  
宗雄むねおと搦なひめいさうとあり一家中いけちゆうののままひひるるののわわああどどがが丸まるが首くびと義ぎ春はる





曙卷之五



龍尾の家  
再興の後  
さあぐの  
怪異のり



の墓前かみづみふも向むか吉日きちつちをさうして宗雄むねおと様姫さめと婚姻こんこんをそのへ鷺さぎの尾お乃の  
家いへを續つぎぬ此時このとき條村じょうむら二部にぶ公光こうみつもわうして山吹やまぶきと婚姻こんこんをほしおら  
然しか不ず弥陀いただ二部にぶ宗雄むねおとふしむる某それ若年わかしの時とき持もちより一いつつさる由よし  
より亡君むしうきみの御勤ごきん氣きをさうあり御在世ごにせい御免ごめんさうけりさう又またふ  
わさゆればもぬがうへ相公さうこう亡君むしうきみふ代うしろひて沙免さづめんさうりけり願ねがひれば  
宗雄むねおとうけがひ義春よしかるの靈前れいぜんふ於おて勤きん氣きをゆりぬけ時とき條村じょうむら二部にぶ勤きん  
氣きをもそのふ免めんさうさうとあ相さう弥陀いただ二部にぶ再またねがひけり某それわめて判はん髮はつ  
の望のぞめりといふも亡君むしうきみの仇うぢを報むかへて後のちと存ぞんトされしやふさぬけしをいふ  
とめて御暇ごいそをたぬりれしとかりひとて願ねがひてもさうさうしむしとて休やすむるが  
是非せひあくいふぬとさうせり弥陀いただ二部にぶ勤きん氣き常照じょうしやう阿闍梨あせりをそのさうして  
法然上人ほつぜんじやうじんの徒弟とだひさうり姿すがたをうへて粟生野あしうの光明寺くわうみやうじの境内けいんふ庵いあんをいふ

曙卷之五

て住仏堂ぢゆうぶつだう建立けんぎやうの志願しげんりりりありわうて鷺尾さぎおの家いへ再また栄さか々さかが羨うらやふ又一また  
の凶吉きうきちさといふれとれ様さまひれ甦よめ生せいと後のちさうく日ひのめをさるをさうしてあふ  
暗所くらところを好このむ哉やくさうて樂あそまど病やまひのりりりありさうが一夜いちや野分のりたの方かた  
臣ひみを慰なぐさんとて酒宴しゆえんを催もよほし碎くだふふとて云いけるはさうさうの凡音ぼんおんをさ  
さうふまれ一いつ手て調てうてせさるやと云いはれ様さまひめ答こたへては年月ねんげつ愁うらむるのかさ  
ありつるふ琴ことさうも手てふふれねば学まなび得える手業てわざもさうさうさう  
ふゆへさうさうとひべれどさうゆりてはかさ合あを計はかもおつらなうて  
ふんと云い神分かみわけの方打かたうち笑わら別わかふさう人もさうさうさうさう  
せんさうさういし初はつさうと云いはれ琴ことひささうさう撫なむる老お前まへとて今いま様さま  
さう  
さう  
さう



色も泣き小唄多々うらやま妙手のもくふまはうらやまも堪能ふてす  
哀を催し世分の方の目をさざ頭をさしてす入る姫はさかひたをゆけ  
折しも俄小灯火くくあり灯臺のわげ小怪さ人わけのりれれば姫を  
そえてのなやと叫世分の方其色小燈る眼をさして怪物をえつけ枕  
刀を抜てもとと斬小忽一團の青火とありて消失口雲を斬とん  
中うふて刀小力のり姫のひさはさる琴を真二つふさりけりめれば琴  
柱とつりと飛散てされる糸のよん尽く蛇と化しかまらびをたて姫の  
方小むくれば姫へこれを目えりより忽倒て絶入ぬ膽ち世分の方を  
惘然として刀をさしおと尻居小童となれりるが姫のめりさぬをえて敬  
いとさく侍女等を叫氣つけ薬をもちか湯をのりて衆抱けり小  
とちじめりて中りく生うらぬこれより姫又病の床小掛けは世分の

曙卷之五

方宗雄を始一同小愁る支限は姫の病只うらうと夢中のごとくふありて  
本性を失ひものもさしと良医をまねきて靈薬をりらひさるが療養  
をらつれども露もうらも験ええど世分の方の世の人小まらりて子を  
うい性されば殊更小悲し昼夜やうをさされど心を尽してぞ看病  
けるさる小一お丑三つぐら小橋ひめ心氣つれさる小やをやくと眠り世分の  
方も看病小つうれてとじくまらりける折しも廊架の方小人乃足音  
ひびき障子ばさとのゆる音を世分の方ねありを醒して顧る館のうら小  
えさるれめうらうらたさる禿二人鎧唐櫃をわけて出来り増額の簾の下  
かろして蓋をのりうらとんは裏より数百の蛇うらめい簾の裾をさ  
てく入様ひわ小花つさ首さげ手らび腹をさふさくひつこけり様  
あまやくと叫つをさるてぞ苦しける世分の方かろき姫をさ





曙  
卷之五



櫻姫妖氣ふ  
おそられて病ま  
臥を夢中  
教百の蛇  
身上ふまふ  
つ  
苦しむ



けんとちひつくまのうへに... 時風流... 棟小高笑... 類異形... 烈火燃つ... 侍女等... 怨霊の所... 妖怪... 止ざり... 切又一夜... 看病

曙卷之五

とて居る... 眠る... 叫ぶ... 左右の手... 面色の... 病と云... 野分の方... 瘦衰... 苦こり



案小唐の陳玄祐が離魂記に天授三年清河の張鑑衡州の家ありその  
 女倩娘のひまづけの夫王宙京師赴をまゝと離魂して一体二形と成り  
 一形王宙が跡をわひ去て蜀のり連なること五年両子を生一形を家  
 のりて病臥と後王宙倩娘をつれて鑑が家おきける病ふりて倩娘  
 よろこびかこつていひ翁然して二人の倩娘合して一体と成るを記す  
 此のりつにふおすねくやうつてふりとのがりと又えて正燈鉢無門関  
 剪灯新話艶異編ホの諸書ホのせととしく異同のり又離魂病のり  
 夏子益奇疾方わび万病回春奇病門不出せりやまふよりて離魂  
 一体二形と成るを治るのりとこれを治るの方のり俗ふのり  
 とふり走るり本文小のり様ひのりこととふり怨霊の所為るべしとふ  
 とひとくく

第十九 櫻姫離魂化為骸骨

とつる小一日弥陀二郎道心常照阿闍梨をとりまひ淀川かて感得  
 靈仏をのりよりて野馬尾館ふ来り宗雄ふよりてしとるのり姫君物のり

曙卷之五

の為ふるやもよはうけむつろその病苦をともひまのりせんとなん法然  
 上人小怨霊得脱の教化をねむりける上人のりまひるる我老衰て歩行  
 とるる遠去てのり常照房を我がよりてつるをばこれを以て  
 教化をばとてこれる常照阿闍梨と人あつまらあふ珠教をさるの  
 かりぬ又け笈依の前の年某淀川かて感得より紫磨黄金乃  
 靈仏かて八幡の神宮の告のりて真身の阿弥陀仏るるをさるひま  
 これふかひをさるる常照阿闍梨とけて上人の高弟かておつゆと  
 云て引合せられ宗雄くわしく礼をば初對面の挨拶をりて云々るの  
 上人の念珠と云真身の御仏のりふ阿闍梨の徳を施しおひて  
 教化のりいぐる怨霊も得脱をば夏よりはねりくハ片時と  
 病苦を救むりれと云阿闍梨のりまらく二郎乃んかお後



承るふさぞあまほくおがもしめ拙僧修行とて験のまもおぢえぬと師の房の命  
この二郎乃公のこの黠いびくこれまふまふと来つかのにおらんこの念んべと  
のまふおと宗雄野分の方不かくとまこえつげに世分の方不び出ひひて姫の病床  
かまらびんたうりかくて阿闍梨二郎乃公と具してかふつれに世分の方宗雄病床  
の左右おとる田鳥篠村山吹等下の方不並居らう阿闍梨且及佛の座を  
ゆゑた香を指して権念ト切病人対面をぐこのまひりん山吹立寄て屏  
風をひこのけね阿闍梨つらつらふ錦の裾をさるらうふ二人の姫黒髪を  
いじ服息ふよりおらととやくと眠居らういふふ病癒らうとてえて肉脱懼  
瘦の粹まう自然の羨豔梨花雨をまう白玉小香をそへる風情あり二人  
そのふおまドさゆふていづれを真の姿いづれを假の姿とつららば阿闍梨珠教  
を袖らふ持袈裟をひこのげつらうとてこのまひりんいふ清玄と

曙卷之五

やうんが靈魂我らる理をよとまよはかりも佛体を學べよをりらて  
急暮の凡情の戒行をやうり罪るた姫を苦めて障災まるとの理をま  
やふ執惑の悪念を滅して成佛得脱を欲せしは清玄眠を醒せしと  
まこまのまひりん二人の様ひわやうり目をひくた験とあは阿闍梨  
をえやうて頭を打ち成仏の望まうは唯け姫おつとまひて苦痛とま  
こまこまらうまひも無益の詞を費しひまるとのひにて又わらうね阿闍梨膝  
をととままの衣の袖をまれのけ詞をまげせそのまひりんわくはは執者  
の悪念満く申有の迷衆とあり更お流轉の穢土をまるとのをら然らふ  
我偶師の房の命とらうけ遙か来りて汝を度せんことを極重悪人无他方  
便本願の利益まうらうんや清玄いふくと責なすひりん二人の様ひわ再  
眠を醒して居たりわり坐を西してのひりんつらうの責めりとも子細を





曙卷之五



怨霊の所乃よ  
 けりて様ひわ  
 離気病  
 をや  
 一休二形  
 とあり



語りますとさひくれども阿闍梨の意を感ずて涙を眼のいそれを語り  
侍らしてこれをきいて我理を察し教化をやめよんくもまてとて元来  
れは清玄が霊のあつて玉琴の怨を鬼のついでにまのいと都の白拍子ふてゆひ  
し故君義春公小贖てまとなり名が玉琴となつて後村八郎公連のふ  
のつゆられ寵愛浅くどつひ小相公の亂をやじて己小八月ふらつる小舟か  
の方の嫉妬あつて蝦蟇つひの所持する尾長蝦蟇と云りのを以て奸計を  
施し兵友ち小命じてまを盗らじり目の前ふてまより殺しふさせられまら  
のさあど面の皮をくぐら赤裸おはし大江山の谷川ふまらつらひかひさせ後日  
直のりれんをかされて其夜ふらふ兵友をて手打は盗賊の体りては  
て衆人を欺さね痛のしや公連のまを奪れらふよりつひのりり  
腹して果られらるるまが死骸のかりのく繩をひて川下小流とつた

曙卷之五

大小腹をくひやがれてまふ胎内の子をくひ殺されんとせしと弥陀二郎  
この情ふより拾取つてつがやうて死けり其時まが鬼魄我子の胸間ふ  
還著して生つてせ弥陀二郎の今抱小管りけるつひ小旅中ふて清水寺  
の歌月阿闍梨をもとられ成長して徒弟となり法名を清玄とふつりの  
ぶれば則清玄の故君義春公の御胤ふて極むるもの別腹の兄弟とほ  
まが鬼魄清玄がやげふつれまひせめて悪趣をまぬれん為字を文讀  
經かこしめど乃力堅固小かこまらせりるが一年極むめこの地主の花見小  
て来る折くいでく養麗ま行粧をえてわくほく我子清玄へ正しく  
姫のえありま恙なく産おくまの如く大勢ふくづくれ桑田の長者  
の若君とぞ致せられまとら小世の樂をこらめ人ののを形分の方の嫉妬  
小しりて非命小死するのま若君ともわくのくもま久出家とす



かき支のらちとやとどひつ姫の義しと粧と清女のいともわじがま  
光景とくくべえろふまほ怨恨いおまらうこても地獄小墮とくく永崇  
とま〜仇と報收をくけむと再清女が胸間ふけ入現在我子おん  
此を記させ戒行をやぢりめて姫をさやま〜も姫お恨ははと〜も  
人ふをぶれてふんおの世分の方の性質るん且目の前ふて姫お苦痛と  
う〜りめて世分の方お歎をさ其後世分の方をもら殺さんとおひま  
ありさればま〜清女と母子兩人ふけれども原鬼魄のつあり様ひらぶ  
小野の里おれた定業ふらうて死せ〜を鳥部野ふて甦生させ今ま  
一念を保〜り〜もまがま世業ふて實の甦生ふれども只世分の方お承  
憂目をこえせんが為あり罪なれ姫を苦しめるの〜く一かか〜も  
う〜この夜姫琴をとる〜其曲の妙さふひ〜れて再出来りまが殺れ〜

曙卷之五

時の苦さをとひ出して又仇をなと〜も〜ありね又世分の方蝦蟇丸が  
殺さ〜りをまが靈小蛇とありて〜めも生かさて百憂目を足せ〜らう  
ふて〜殺ん為あり又相列竹の下ふてまが靈小蛇とあり弥陀二郎の  
を〜らび〜て藤村ふ會世も〜二郎の〜我屍を〜我子と拾取  
ま〜り恩人ありまの村の〜妻お父公連の切腹のり〜其  
も浪の才とありま〜痛〜し〜西士を會〜りて互ふ力と合〜せ  
義春公の仇をも〜〜へ〜まが寸志かりけ子細を〜〜水  
姫をさやま〜して世分の方を苦めんと〜阿闍梨の意を懸〜が  
語ら〜とま〜り〜も成仏の望ほ〜御飯りの〜  
世分の方おひ〜てはまをさ〜殺〜ふ〜せ〜時まが苦痛つ〜  
ま〜んとお〜や生〜り死〜り六道四生お怨をさ〜と〜



忘らうやく子細を語るうへ永此土ふとまらうとびえりく近きふ汝をこり  
 殺しとり不捺落不率てゆらんそひちるべいと云つゝ抑眉をこころとて星眼  
 をいつじてこころとあつてくる光景かほしあどもおろろありやくののりのも  
 才のそとくさも二人の採ひめおほさるふかてりづれを真とらうりめこー  
 たれくもこま清玄の死霊とのしくひて玉琴を怨鬼あることふかつてい  
 これをゆつてかどらねのひぬ時か阿闍梨病床近くよりてのこまひくろい  
 独が相招をまらび遺恨の涼さも理るれど怨恨の悪鬼とありて永劫悪  
 趣ふらばまんとり我教化をすりてこころ成仏得脱せよとて四誓の偈  
 を教遍誦し心経三遍くらみ随求陀羅尼光明真言顯密甚深乃  
 神呪陀羅尼を誦しむひりる不思議や及佛の白毫より光明赫奕  
 を発して病床をこぼりけり忽二人の採ひめひれ伏てこれを拜し感涙

曙卷之五

を流しつゆのならうとやとまや今恨もともけつとひわがうく安養  
 浄土引導したまわれじと云てや得方の侍るが阿闍梨まらび十念を  
 まがり玉ひて後身をおじて二人の姫のしろふ立色をまげほしてのこまう  
 殻を出て殻お入る旅舎お宿とらう如く地水火風一まらび散ぞ  
 蜻蛉の湯お落るが如く汝從來是一う是二う  
 こひるまら珠数をりつて且左りの方の採ひめの頭を打むふお怒姿と見え  
 うせそ一つの小蛇とあらう頭より光をともちて飛失ぬ又右りの方の採  
 ひめを打むへ今目で嬋娟る花の姿忽氷の朝日おとらうが如く消失て  
 身おまらひとら小袖と一具の骸骨のまを褥の上お残りとら採ひめ絶世  
 の養人あらとら骨と化してあの人おらうとらとらふ醜美のみ只真皮  
 一重おのの好色の輩らふ於て悟とへ相とあけけ体とらて且驚





曙卷之五



常照阿闍梨  
の教化よりそ  
怨霊得脱と  
みよひあはれ  
散骨と  
まは



且悲<sup>し</sup>ぢ<sup>に</sup>一<sup>つ</sup>點<sup>てん</sup>して居<sup>ゐ</sup>たりり<sup>ら</sup>彌<sup>み</sup>陀<sup>た</sup>二<sup>に</sup>郎<sup>らう</sup>乃<sup>の</sup>心<sup>こころ</sup>を<sup>を</sup>知<sup>し</sup>て云<sup>い</sup>ふ小<sup>こ</sup>子<sup>し</sup>十<sup>じゅう</sup>八<sup>はち</sup>年<sup>ねん</sup>  
 以前<sup>いぜん</sup>回<sup>くわい</sup>國<sup>こく</sup>修<sup>しゆ</sup>行<sup>ぎやう</sup>ハ出<sup>い</sup>丹<sup>たん</sup>波<sup>は</sup>の國<sup>こく</sup>大<sup>だい</sup>江<sup>かう</sup>山<sup>さん</sup>の麓<sup>ふもと</sup>に女<sup>にま</sup>の屍<sup>しかばね</sup>より犬<sup>いぬ</sup>の吐<sup>つ</sup>出<sup>し</sup>てる  
 胎<sup>たい</sup>子<sup>し</sup>を拾<sup>ひろ</sup>取<sup>と</sup>つゝ旅<sup>りゆう</sup>中<sup>ちゆう</sup>に養<sup>やしやう</sup>育<sup>いく</sup>心<sup>しん</sup>のどくありたりり<sup>ら</sup>一人<sup>ひとり</sup>の旅<sup>りゆう</sup>僧<sup>そう</sup>小<sup>せう</sup>子<sup>し</sup>  
 行<sup>ぎやう</sup>者<sup>しや</sup>の才<sup>さい</sup>に赤<sup>せき</sup>子<sup>し</sup>を推<sup>お</sup>薦<sup>せん</sup>をいふ子<sup>こ</sup>細<sup>こ</sup>をとりけるゆゑふりぐのほそ  
 語<sup>ご</sup>り<sup>ら</sup>れ<sup>ば</sup>いと哀<sup>あは</sup>れ<sup>れ</sup>小<sup>せう</sup>兒<sup>に</sup>を我<sup>われ</sup>手<sup>て</sup>に我<sup>われ</sup>養<sup>やしやう</sup>育<sup>いく</sup>して成<sup>せい</sup>長<sup>ちやう</sup>の後<sup>のち</sup>徒<sup>と</sup>弟<sup>てい</sup>  
 とは其<sup>その</sup>母<sup>ぼ</sup>が菩<sup>ぼつ</sup>提<sup>てい</sup>をも<sup>も</sup>こ<sup>こ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>それゆゑ幸<sup>さい</sup>の直<sup>ちやく</sup>と<sup>と</sup>ひ<sup>ひ</sup>小<sup>せう</sup>兒<sup>に</sup>を旅<sup>りゆう</sup>僧<sup>そう</sup>  
 手<sup>て</sup>へその<sup>その</sup>ち<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>に<sup>に</sup>や<sup>や</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>し<sup>し</sup>が<sup>が</sup>お<sup>お</sup>ひ<sup>ひ</sup>さ<sup>さ</sup>や<sup>や</sup>彼<sup>かの</sup>屍<sup>しかばね</sup>ハ玉<sup>たま</sup>琴<sup>ぎん</sup>の  
 小<sup>せう</sup>兒<sup>に</sup>相<sup>さう</sup>公<sup>こう</sup>の御<sup>おん</sup>胤<sup>いん</sup>旅<sup>りゆう</sup>僧<sup>そう</sup>ハ清<sup>せい</sup>水<sup>すい</sup>の敬<sup>けい</sup>月<sup>げつ</sup>阿<sup>あ</sup>闍<sup>じやく</sup>梨<sup>り</sup>清<sup>せい</sup>玄<sup>げん</sup>法<sup>ぽう</sup>師<sup>し</sup>ハ彼<sup>かの</sup>小<sup>せう</sup>兒<sup>に</sup>を  
 君<sup>きみ</sup>と腹<sup>はら</sup>が<sup>が</sup>り<sup>り</sup>の御<sup>おん</sup>兄<sup>けい</sup>弟<sup>てい</sup>を<sup>を</sup>め<sup>め</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>そ<sup>そ</sup>れ<sup>れ</sup>と夢<sup>ゆめ</sup>や<sup>や</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>さ<sup>さ</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>も  
 のり<sup>のり</sup>ん<sup>ん</sup>ふ<sup>ふ</sup>誤<sup>ご</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>ふま<sup>ま</sup>が<sup>が</sup>清<sup>せい</sup>玄<sup>げん</sup>法<sup>ぽう</sup>師<sup>し</sup>を我<sup>われ</sup>手<sup>て</sup>に<sup>に</sup>後<sup>のち</sup>悔<sup>くわい</sup>さ<sup>さ</sup>  
 と云<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>拳<sup>こぶし</sup>を<sup>を</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>歎<sup>なげ</sup>れ<sup>ば</sup>阿<sup>あ</sup>闍<sup>じやく</sup>梨<sup>り</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>な<sup>な</sup>歎<sup>なげ</sup>れ<sup>ば</sup>清<sup>せい</sup>玄<sup>げん</sup>

曙卷之五

一生<sup>いっせう</sup>を<sup>を</sup>と<sup>と</sup>不<sup>ふ</sup>汝<sup>にょ</sup>為<sup>ゐ</sup>ふ生<sup>なま</sup>下<sup>げ</sup>て汝<sup>にょ</sup>為<sup>ゐ</sup>ふ滅<sup>めつ</sup>是<sup>ぜ</sup>因<sup>いん</sup>果<sup>くわ</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>し<sup>し</sup>所<sup>しよ</sup>不<sup>ふ</sup>  
 一<sup>いっ</sup>く<sup>く</sup>汝<sup>にょ</sup>が<sup>が</sup>ま<sup>ま</sup>せ<sup>せ</sup>業<sup>ごう</sup>ふ<sup>ふ</sup>め<sup>め</sup>ど<sup>ど</sup>け<sup>け</sup>う<sup>う</sup>ハ只<sup>ただ</sup>の<sup>の</sup>人<sup>ひと</sup>の<sup>の</sup>菩<sup>ぼつ</sup>提<sup>てい</sup>を<sup>を</sup>と<sup>と</sup>し<sup>し</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
 志<sup>し</sup>と<sup>と</sup>て珠<sup>しゆ</sup>数<sup>ず</sup>つ<sup>つ</sup>ま<sup>ま</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>念<sup>ねん</sup>佛<sup>ぶつ</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>へ<sup>へ</sup>と<sup>と</sup>お<sup>お</sup>じ<sup>じ</sup>け<sup>け</sup>り<sup>り</sup>時<sup>とき</sup>分<sup>ぶん</sup>の<sup>の</sup>方<sup>かた</sup>ハ始<sup>はじめ</sup>終<sup>しまひ</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>  
 只<sup>ただ</sup>う<sup>う</sup>ろ<sup>ろ</sup>む<sup>む</sup>じ<sup>じ</sup>死<sup>し</sup>せ<sup>せ</sup>る<sup>る</sup>人<sup>ひと</sup>の<sup>の</sup>ご<sup>ご</sup>ろ<sup>ろ</sup>に<sup>に</sup>才<sup>さい</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>も<sup>も</sup>せ<sup>せ</sup>と<sup>と</sup>して居<sup>ゐ</sup>たりり<sup>ら</sup>十八<sup>じゅうはち</sup>年<sup>ねん</sup>  
 才<sup>さい</sup>人<sup>にん</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>り<sup>り</sup>隱<sup>いん</sup>悪<sup>あく</sup>一<sup>いっ</sup>時<sup>じ</sup>ハ露<sup>ろ</sup>頭<sup>とう</sup>して<sup>して</sup>と<sup>と</sup>が<sup>が</sup>大<sup>だい</sup>膽<sup>たん</sup>強<sup>きやう</sup>氣<sup>き</sup>の<sup>の</sup>心<sup>しん</sup>も<sup>も</sup>面<sup>めん</sup>目<sup>もく</sup>  
 ま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>や<sup>や</sup>お<sup>お</sup>の<sup>の</sup>が<sup>が</sup>居<sup>か</sup>間<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>ろ<sup>ろ</sup>に<sup>に</sup>自<sup>じ</sup>害<sup>がい</sup>せ<sup>せ</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>思<sup>おも</sup>ひ<sup>ひ</sup>たり<sup>り</sup>や<sup>や</sup>守<sup>まも</sup>刀<sup>とう</sup>を<sup>を</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>  
 度<sup>た</sup>づ<sup>づ</sup>い<sup>い</sup>不<sup>ふ</sup>馳<sup>し</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>け<sup>け</sup>り<sup>り</sup>折<sup>せ</sup>れ<sup>れ</sup>も<sup>も</sup>青<sup>せい</sup>天<sup>てん</sup>俄<sup>が</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>り<sup>り</sup>大<sup>だい</sup>雨<sup>う</sup>車<sup>しや</sup>油<sup>あぶら</sup>と<sup>と</sup>流<sup>なが</sup>電<sup>でん</sup>光<sup>かう</sup>  
 暴<sup>あらし</sup>くと<sup>と</sup>閃<sup>ひら</sup>き<sup>き</sup>雷<sup>らい</sup>色<sup>しき</sup>大<sup>だい</sup>小<sup>せう</sup>鳴<sup>なり</sup>と<sup>と</sup>め<sup>め</sup>き<sup>き</sup>野<sup>の</sup>分<sup>ぶん</sup>の<sup>の</sup>方<sup>かた</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>の<sup>の</sup>う<sup>う</sup>ハ不<sup>ふ</sup>災<sup>さい</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>に</sup>せ  
 かり<sup>かり</sup>と<sup>と</sup>す<sup>す</sup>ろ<sup>ろ</sup>が<sup>が</sup>體<sup>たい</sup>を<sup>を</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>か<sup>か</sup>ひ<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>げ<sup>げ</sup>られ<sup>れ</sup>二<sup>に</sup>つ<sup>つ</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>裂<sup>れ</sup>ち<sup>ち</sup>大<sup>だい</sup>地<sup>ち</sup>ハ  
 ぞ<sup>ぞ</sup>ぞ<sup>ぞ</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>る<sup>る</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>光<sup>かう</sup>景<sup>けい</sup>を<sup>を</sup>て<sup>て</sup>才<sup>さい</sup>の<sup>の</sup>毛<sup>け</sup>を<sup>を</sup>ば<sup>ば</sup>と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>る<sup>る</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>  
 の<sup>の</sup>晴<sup>せい</sup>天<sup>てん</sup>と<sup>と</sup>る<sup>る</sup>ね<sup>ね</sup>時<sup>とき</sup>ハ阿<sup>あ</sup>闍<sup>じやく</sup>梨<sup>り</sup>示<sup>し</sup>して<sup>して</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>後<sup>のち</sup>漢<sup>かん</sup>の<sup>の</sup>袁<sup>えん</sup>紹<sup>せう</sup>が<sup>が</sup>妻<sup>さい</sup>夫<sup>ふ</sup>



死して其愛妻五人を殺し鬚頭面小墨して其形をうり于寶が母夫亡  
 る小及び寵愛の侍婢を生さるる夫の墓中小埋むけたるひの妬婦のり  
 とつども神分の方の隠悪のごとく死にいまも誠是極重悪人といひつ  
 べ天刑とくうあつて雷死せしも理ぞし和漢の古と考ふる隠悪を犯せ  
 者雷死せしゆまゝと常言ふ人を瞞びて天を瞞へうごごつり明なる所  
 小八王法のり暗とくう小神靈のり隠悪と犯して豈能罰をまねんや  
 神分の方の雷死のむ死に世人のよれ教戒ありせりて冥途の苦患を  
 とくひつらうとくべし庭ふをりて焼くはれり屍もむひてとくく  
 経をよくむひ初宗雄小告て棺をつらじわ神分の方の屍と極ひわの遺  
 骨ととくめえ二つの棺をさるるて引導の詔とくぐけむひわれれ家  
 中の男女次の間小居なぐれて歎悲色とくくはるるうらうらつてお人の

曙卷之五

送葬をかこみ追善の仏事をいさるるまで阿闍梨の弥陀二郎乃公  
 とも小け館小逗留しむひぬとる小宗雄田鳥造酒丞篠村二郎のぬ人  
 を近く味て云々の男義春相公存生の時某を極ひわめわのいさんと  
 定むひの畢竟血とらとくやとほはさ為ある小極ひわうせよれえ  
 某の家と續時たとも後妻とむて一子をまうるも尚家の血とら  
 へ絶るるにありて安義春の甥ある少年を吉備津の祢王額田  
 小某とやんが養子小つらひされらるるやとふも今ハ実子をまうけらる  
 は幸のまさればかの少年をと取汝等ぬ人補佐して尚家を續し  
 めこれ血とらと絶さるる計小めらざら我ハ今より菩提の道小  
 つり剃髪染衣小姿をうへて男夫婦姫兄弟玉琴等が菩提をこりん  
 と心をさめられ万支汝等ぬ人小たのこめらざら忠節を尽まは





曙卷之五



玉琴の怨鬼つらふ  
 ちりて野分の方十八  
 年前の隠悪の  
 れ雷ふるん身体  
 今ゆ 死を天刑  
 遅速わりのハ  
 さあさあさ  
 ひんわり  
 かたれ  
 づい









其二

曙卷之五



十一



のこめんと世不望と云へ唯一のありのここれ別夏ふのぞ弥陀二郎年来  
 一宇を建立して感徳の霊仏を安置さるる宿願のりつとていふ  
 遂さるよー我け大且邪とるふさ望あり義春相公夫婦清玄法師  
 梅ひり玉琴等が菩提の乃いゝりた功德をいふ汝等此言をよとて  
 りひて得させしと云ふも人々望てしつと安ん御言あり速ふた  
 らふべしとて國ふりりゆゆの金銀を乞ひて弥陀二郎ふふへけれ  
 二郎乃公女ふす修ひ則宇治郡五箇の庄一宇を建立し一の霊仏を  
 安置して常照阿闍梨を開基の主とて不断念仏の道場とてはふ  
 ける西方寺とつめりさるる是るなりとて

山州名跡志を案ふ弥陀二郎道心常照阿闍梨とゆふの寺ふ  
 住人皇八十五代後堀河院の御宇貞應元年七月十日二人ひとく

曙卷之五

本尊の示現を得て同日同時ふ安祥とて大往生をさるる

二人の木像今ふのりと記せり

かくて源宗法師弥陀二郎が宿願をさるるめてまのりさるる  
 ける一夜極ひめの亡霊枕上ふ立のりける顔ふて告て云かん身  
 菩提の乃ふ入ふふうへ我等が乃ふ仏堂を建立のり大功德ふ  
 よりて我輩親子兄弟五人愚趣の苦患をまねくれ安養浄土也  
 生り夏を得たり其證ふせりといひて仏壇ふ供ふたるる木の  
 枝をさるつ云けるこれ庭上ふさかさあへかあるる根を生ト  
 て花咲るん是乃我輩が成仏得脱の證ありとてふ又云兄清玄  
 法師の遺骨を於此の草ひふ残れねらと拾取て埋葬し一の  
 石と建てむりれりつりまても名残のいふけねど仏体をうけりへ



戦の宗雄の  
 法然上人の  
 徒弟の  
 剃髪  
 源宗とよ  
 夢中ふ孫ひめ一枝の  
 孫をわふ楊貴妃  
 梅の来由是なり



曙卷之五

〇九三



穢土の往来をくくられど長き別れは再會へ極楽浄土までと  
云て烟のごとく消えと見えしが忽軒端の風鈴當的ひびきて  
南柯の夢ハ醒ふより源宗名残をいげふれりるをいふ小枕上小  
椽の一枝依然として残るれば奇異のあひをなすの枝をさして  
庭上ふささ清玄の遺骨を尋りしめ煩惱即菩提の意とり  
ておのれがりとふやうりる桜ひめの豔昏をとりておのれがりとふやうりる  
をいふこのふ一つの箱おさめて姫の終馬の地小野の里小埋く  
一塊の塚とまゝ印の石を建て跡ねんらるふらひりひり櫻塚  
一名文塚といふは乃是ありとぞ

案ふ山州名跡志小櫻塚一名文塚傳云小野の小町豔色あるを  
以て四方より豔昏をいふると雨の如く仍て懺悔の為に収る所と

云本文の説とげ説といふれは是るをあらうとぞ

曙卷之五

源宗法師庭上ふささ椽の枝姫の詞ふたがへど日あつて根を  
生ど一度落花なる枝再花咲ねれば初成仏とてかひはと歡喜の  
涙袖をまがりぬつひお上人の庵室小往来して法をすまはれがかの  
松虫鈴虫の両尼小出會しお治のついで兄弟愛宕の山中おありし  
時の子細を語をきけてその上臆こそ愚僧が姑ふて椽ひめ乃母たり  
こそ雷死のころをささり蝦墓丸義春を打田鳥やれを射殺して仇  
をひくいてる夏まで懺悔の為にやうりるをいふ兩尼をきけて因果の  
歴然たる理を曉くむる野分の方お人の乃お一七日のついで別時  
念仏を修行しりる仇と以て思ふ報ざる志いと殊勝なりといふ  
入るしらるるお上人遷化のころ源宗南都小移り真福寺小法録



つらゆり境内ふ菴室を造て住けるが木の木の木をも携ゆて庭中  
ふ極ぬりつらゆり靈木るん益生のびて枝葉をげり年々終るふ  
大樹とありて春毎ふ花爛熳として錦を欺く源宗たふこれ  
を愛し花の時あり且夕樹下ふ序として終日終夜灯をわけてる  
るふど時の人源宗が愛樹るんはこて楊貴妃様とよびふりこれ  
い源宗唐帝の玄宗と音の響相似るを以てるふひけれとと  
の様今ふ猿沢の東右垣五十二壇の上左の方ふ在て枝葉をる  
案ふ貴妃様の支るる説ふ似たりとつへとも奈良晒三十三張  
南都名所記大和案内記等ふのせて普世ふ云伊説なり  
源宗法師人皇八十五代後堀河院元仁元年甲申五月十日  
歿寂時ふ享年四十歳とと

さるやふふ尾四郎義基家を相續し田鳥造酒丞長篠村  
二郎公光あ人補佐しけるふ義基若年なりとと聰明伶俐にして  
文学武藝ふ通しよく家人を撫育しける一家中あぶる限なく  
誠小賢君ありとと敬しけりふ承久一乱の刻義基鎌倉の  
味方ふらつて宇治川の合戦ふいづき武功をのびる鎌倉の  
二品禪尼政子の聴ふ達し軍功比類ありとと叛逆の公郷の所領  
没収の地を賞充するの下文を賜先祖傳來の庄園ふ一倍して  
益家富宋伴の希雄のそゑの娘源宗法師の妹なりける楓と  
いへるをめたり三男二女を生夫婦長寿を保子孫繁茂しと  
累代巨萬の富をほ桑田の長者とと近世までも豪農ふてのり  
一とつね誠は一場の奇談なりととや





曙卷之五



義春の甥を鷲  
 尾四郎義基と  
 名のせ田鳥  
 篠村西人補  
 佐と家を  
 つうせ先けが  
 忠義を尽  
 一とれ者  
 等不賞を  
 九とれと

九とれ











